

川端康成展

内藤 真理子

駒場の日本近代文学館開館五十五周年を記念して、川端康成の没後五十年展が開催されているので行ってきた。

はじめに川端康成の着物姿の写真が目に入った。大きな目と気難しそうな顔。ザ・ノーベル賞作家、といった感じで、日本の美を象徴するような作品が頭に浮かぶ。

副題には――人を愛し、人に愛された人――と謳ってある。あれ！どうもイメージが違うな〜と思いながら先に進んだ。

だが、見ているうちに、今回の作品展は、正にそこに光を当てて、意識的に人間、川端康成の姿を浮き彫りにしていることが伺えた。

彼は、物心つく前に両親を失い、十五歳で最後の肉親の祖父を亡くした。

その為、肉親を失う悲しみを共有できたのだろう、葬式の名人、会葬の名人、と言われるほど、亡くなった人、残された人に関わったそうだ。弔辞、追悼文は数知れず残っていて何作か展示されていた。

川端が小説家を志望したのは、大阪府立茨木中学二年の十三歳の時だと年表にあった。早くから文学の道を目指していたのだ。その後、大学時代に菊池寛氏に認められ、文芸時評に頭角を現した。氏には芥川龍之介や久米正雄、特に親しくなった横光利一等、色々な人を紹介され、多大な恩顧を受けている。

人が好きで人付き合いが良く、色々な人との手紙のやり取りが展示されていた。人とのつながりを追い求め、作品を書く時間も惜しまず、夜を徹して手紙を書いていた川端の姿がうかがえるという解説があった。

中には、太宰治のものもあった。

川端は菊池寛氏の創刊した文芸春秋で芥川賞の選考委員をしていた。川端康成二十四歳の時である。この時、小説家を目指していた太宰も自分の作品を川端に手紙を添えて献呈しているのである。

太宰青年も芥川賞を目指す健気な一文士だったのだと、若き日の太宰治を見る思いがした。

太宰に限らず、小説家を目指す読者との交流を示す手紙もあった。

正に、人を愛し、人に愛された、川端康成の姿が展示されていたのだった。